

〈論文〉

コミュニティズム詩論にもとづく全員参加型野外詩劇  
『ボオの森の太陽まつり』の実験的な上演とその成果の分析

原子 修

## I 前文

世界的に、詩は行き詰まっている、といわれる。多くの要因があるが、その一つとして、詩のバックグラウンドの問題も、見逃し得ない。大都市型の、特殊化された知識人対象の、主知主義的な詩が行き詰まった、というべきであろう。いわば、国家、大都市、エリート立脚型の散文的抗争体系の文明の自壊作用の一つとして、この種の詩の傾向が終焉を迎えつつある、ともいえる。

では、それにかわる、新しい傾向の詩とは、どのようなものか。

それは、国家・大都市・特殊エリート立脚型の散文的抗争体系の詩を脱却し、コミュニティ・生活共同体・生活者立脚型の詩的共同体系の詩の創出と活性化の方向をとるであろう。

その様な、詩的共同体系の詩の原理として、まず「コミュニティ・ポム詩論」を構想し、更に基層的にそれを補強するべく「縄文詩劇論」を構想した。

そして、その理論を実践にうつす磁場として、北海道の穂別町（人口約四二〇〇人）を選定し、そこで、理論の具体化のための、全員参加型の野外詩劇を実験上演した。

本稿は、その全容を、次ぎのような構成でまとめたものである。

## I 前文

## II 序論

1 “現代詩”は、終わった。

2 縄文詩劇論

3 コミュニティ・ポム詩論

4 穂別コミュニティとの出会い

## III 全員参加型野外詩劇「ポオの森の太陽まつり」の実験上演

1 スタッフ、キャスト

2 台本

3 分析(1)

「見物人の殻にとじこもる時代は終わった」

4 分析(2)

① 「ポオの森の太陽まつり」上演における、アーチストグループとの連携

② 「ポオの森の太陽まつり」上演における企画、伝達

③ 「ポオの森の太陽まつり」上演における、人的支援と経済的支援

## II 序論

### 1 “現代詩”は、おわった。

“現代詩”は、おわった。ユーロポイド詩への偏執病として出発した“現代詩”は、ついに、詩の送り手と受け手の同質化という末期症状をもって、絶命した。

しかし、これは“詩”そのもののおわりを意味するものではない。

逆に、あたらしい“詩”のはじまりを意味する。

一八世紀以来の産業革命が、都市を根城とし、国家をテリトリーとして、地球上を、鉄とコンクリートの暴力的な嵐として席卷する間にも、生活者としてのひとりひとりの深部にかくれひそむ、そのひとなりの根源人のうたう深層の詩は、けっしてやむことがなかったし、いまも、やむことがない。

第二次大戦後の、かすかにさしそめた曙光も、たちまち、冷戦構造というナショナリズム・ガムテープによって封じこめられ、一九九〇年代の、冷戦構造の氷解化現象がやっと訪れた時、この列島の“現代詩”と名づけられた、ユーロポイド詩への偏執病傾向が、じつは、東西対立というユーロポイド世界内の自閉的な構

造矛盾そのもののシンボリックな反映であったという事実が露呈した。

すなわち、詩的共同体再建への絶望感からくる、散文的抗争体への自虐的な自己疎外癖と自閉化癖。

しかし、もはや、特殊化された少数知識人層のスラング・ゲイム化した“現代詩”は、死んだ。

いま、わたしたちは、“現代詩”の屍肉をついばみ生きる禿鷹としてのエピゴーネン族に、みずからをおとしめてはならない。

いま、わたしたちは、おのれの深部にかくれひそむ根源のひとから、みずみずしい感動をいまつくられたばかりのういういしい言葉に形象した“詩”を、おのれのなま身の手のひらにうけとらなければならない。

では、“根源人”の“詩”とは、なにか。

まず、それは、なによりも、“詩”の発現点への、さわやかな帰還であろう。

そして、それは、つぎのいくつかの視点によって、かなえられる。

#### 1 極私への掘削

詩は、極私の結晶である。

極私は、わたしそのものの、なにびともゆずりわたすことのできない、風土の特性や帰属する人間集団の文化特質、さらには、時空をつらぬいて鳴り響くわたしじしんの個的特徴に深く沈降した、闇の水底であり、わたしの意識の目を、ついには、不可視な深部へとひきずりこむ、わたしだけの無意識の無量性である。

その、母源空間に暗黒のアンフォルメルとしてよこたわる、わたしそのものの究極の不条理をうつくしく苦しむ、もう一人のわたし。

それゆえ、わたしたちは、詩のファッション化現象への攻撃と破壊をおこたってはならない。

重要なのは、この列島にモンゴリアンの末裔として生まれそだったわたしじしんの原体験の総量とその言語化なのであって、けっして、アンドレ・ブルトンのそれらへとおのれを擬似化することではない。

## 2 根源への掘削

ジャーナリスティックな表層現象の、また、コマースヤリスティックな実利傾向の波に溺れ死んではならない。

また、シュールレアリストが秘法化したオートマティスムの慣習にめしとられてはならない。

宮古島のユタのひとびとが暗示する、個人的な無意識から集合的な無意識へと、ユングの誘導にしたがって、おのれの意識とこばを根源化しなければならない。

石が泣き、草がうたい、死者が語りはじめるであろう。

すべての、表層現象への攻撃と破壊の手をゆるめてはならない。現代の、あたらしいシャーマンの詩を、創造しなければならない。

## 3 肉声伝達への掘削

活字の檻に、肉声を幽閉する悪習から、どう、おのれを救い出さうか。

アイヌ民族のユーカラは、ただ、肉声伝達回路のみを選択することによって、個々の朗唱者の自由なアドリブを索引し、複雑な集団創造の磁場を死守しえた。

活字印刷のみに依存する悪癖への攻撃と破壊をやめてはならない。

活字依存病理の転位現象としての、前頭葉偏愛的な主知主義の罟にはまってはならない。また、その癌病巣としてのイマジズムの石牢にみずからをとじこめてはならない。

#### 4 コミュニティズムへの掘削

コミュニティとはなにか？ それは、極私者同志の根源的な肉声関係によって成立する、なおも失われつつある生活共同体である。

津軽のいたこ詩人は、いまも、心的なコミュニティの中心に座標し、ますます、都市へ国家へと亡命していく詩の創り手たちの欠席状況をあがないつつける。

都市と国家とその文化的指標としての共通語の独占政策への攻撃と破壊を休んではならない。

東京山の手方言（共通語）を母語とするものと、津軽方言を母語とするものは、全く同等の詩的位置を占めうる。

#### 5 自然との共生関係への掘削

詩のことばの発現は、大自然の森羅万象への擬人化によるパーソニフィズム（汎人論）である。それを支える、根源的な心理現象としてのアニマティズム（汎命論）。

現代のホモ・サピエンスが、合理主義の名のもとに破壊しつつける、人と自然の共生関係は、深層的には、山に命をみ、風に人格を感じとる詩的感受性の増強なしには、回復しえないであろう。

それゆえ、すぐれた詩を創造しようとねがうものは、文明優位の人工主義への攻撃と破壊にとめなければならない。

#### 6 宇宙の法則性への掘削

アニミズム（汎霊論）の知恵と習慣なしに、ひとは、川に産業廃棄物をすて、空に煤煙をまきちらしつつけるであろう。

しかし、詩は、本質的にアニミスティックであり、ポリセイズム（多神論）の、想像力的な帰結である。宇宙の摂理の全量は、パーソニフィズムによって人格化され、神となる。

あたらしく、広汎な、詩のうけ手を獲得しようとするものは、アニミズムの爆発現象としての祝祭に関与する責任があり、そのための、自らの絶対神化という独善的かつ自閉的なエゴイズムの神話への攻撃と破壊活動を続行しなければならない。

#### 7 詩的共同体再建への掘削

かつて、わかい男と女が、歌ことばで、恋の相手をさがしあてた、あの歌垣の、高水準な詩的共同体は、現代の、この列島の、厳しい時空状況の中で、より現代的な手つづきと詩法によって、絶対に復権されなければならない。

しかし、そのためには、この列島の深部に地下水脈としてせせ

らぐ、ぼう大な、生活者たちの日常語の中の詩脈、方言のダイナミズム、子どもたちの詩のエネルギーなどを、勇気をもって、すくいとらなければならない。

そして、それを、わたしじしんの、極私的な深部の、ついには不条理をになうしかないものの美意識の手のひらに、たたえなければならぬ。

指のはざまからこぼれ散る、すきとおった、わかりやすい言葉で、深く重い感動を、うつくしく、永遠の詩にかなでなければならぬ。

ついには戦争へと帰結する暴力機構としての散文的抗争体への攻撃と破壊を、ただ一篇の、かぎりなく感動的な詩の創造によってかなえなければならない。

## 2 縄文詩劇論

ひとの魂をまばゆい感動の光でさながら輝き映える宝玉のように燃やすことのできる「ほんものの詩」は、いつも、活字をとおりぬけて、頁のうらがわにせせらぐ、名づけようもなく根源的なコミュニケーション空間で、詩の送り手と受け手を、不死のきずなでむすびつけた。

しかし、「根源的なコミュニケーション空間」とは、なにか。

(七四)

それは、まず、詩の送り手たるわたしの、生存の原点にしっかりと根をおろした原体験の豊沢からはじまる。

わたしじしんの、うまれ故郷たるハコダテの、そだちの古里としてのエサシやキコナイやツキサップの、そして、くらしの原郷としてのニムオロやウエンペツやサツポロの、風土と、時間と、そして人縁の織りなす生のマンダラからすなどりえた、感動の総量からはじまる。

そして、あたかも、おびただしい真珠母のように散乱するそれらに、わたしが贈与しえた、原言語のごとき、ういういしい発語本能の、曙光の輝きからはじまる。

そして、ついに、それらの原体験の総量を、わたしの詩の受け手たるあなたが、詩の送り手たるわたしとともに共有する、という、かけがえのない共同体的な関係の成立によって、はじまる。

「感動ぶかい詩」をして、まず、おのれの発生の原点たる土俗へと回帰せしめよ。

「感動にみちあふれた詩」をして、ひとまず、みずからの存在の基点としての風土へと凱旋せしめよ。

それによつてもたらされる「ほんものの詩」こそが、やがては、全人類によつてうけいられ、価値づけられる、「世界の詩」となるであろう。

そして、わたしにとつての、そのようなたぐいの詩が、とりあえずは、わたしという存在の地下水脈をなす、ホツカイドーの、風土と伝統と人縁の深部をつらぬきながれる、なんとなし縄文的なものに躁をあらわれている、という事実も、また、否めまい。

#### 一、縄文の深部へ

かつて、この島ホツカイドーは、この列島（現在のニッポン）のすべての地域とまったくおなじに、詩的共同体タイプの縄文人の、苦楽にみちあふれたくらしの古里であつた。

大地の肉片としての粘土をおしただいて造形し、火の神のちからをかりて焼いた壺は、宇宙の摂理の形象そのものとして、たべものを煮、酒をかもし、神への献げの水をたたえる、想像力の器となつたし、土面はシャーマン詩人の人格を超自然的なものへとアマルガムする仮面となつて根源的な祭祀空間を演出する劇的な装置となつたし、土偶はひとの魂をひとの形に外在化させることによつてえいえんをすかし見るパーソニフィズム（汎人論）、さらにはセルフイズム（汎自論）の神儀の仕掛けとなつた。

宇宙時刻の目盛りを刻むストーン・サークルは、天文学的に膨張していく時空意識を測量する、生死を超えたコスミズム（宇宙論）の計器であつたし、ちいさな琴状の木片の断片は、あきらかに、

銀河系をミニマリズムの漏斗にながしこんで、矮小なおのれの階調へと縮尺できる、秘儀の楽器をしのばせた。

大地をえぐる竪穴住居の凹面には、あきらかに、反宇宙の投影としてのおどろおどろしさがよどんでいたし、巨木建築の名残りとしての太い丸太材の埋め跡は、万象のうつろいに霊の実在を確認しえた縄文人の鋭敏な感受力と、そのこよなき発現を壮麗な「精霊の家」に具現しえたアニミズム（汎霊論）の爪跡をおもわせた。

ペリドットの石と会話し、ハスカップの花と合唱し、蛇のかたちづくる紋章文字を解読しえた縄文人の、いたくアニマリスティック（汎命論的）なライフスタイルは、そのまま、多くの良質の部分を、直系の子孫たるアイヌ民族の、豊かな親自然の知恵として、現代に伝承しえた。

これらの、人と自然の共生をもとにした、神威を重んじ、信義に生き、美意識と精神文化優位の、いたく「詩的共同体」的な伝統は、同時に、家族的結合にもとづく自己犠牲の愛の思想を中軸にすえ、コミュニティ（生活共同体）を世界の最重要分割単位としてかんがえる世界観をベースとするものであり、これこそは、二〇世紀末人類がその中であがき苦しむ、自然破壊、神威否定、不信の關係、実利と文明技術優位、利己的な他者犠牲の要求と大都市・国家依存による戦争肯定論をかかえこむ「散文的抗争体」

的な現状を変革へとみちびきうる、最新かつ最重要のパラダイムといえるし、わたしのものとめねがう「あたらしい詩」も、また、この島やこの列島の縄文伝統を「詩的共同体」的なものの復権をおしてうけつごうとのぞむ未来志向的な詩学の中に存在するといえるであろう。

そして、今日の状況における「あたらしい詩」は、「詩的共同体」的な伝統の今日的な開花としての、「ぐらしの深奥に根をおろした詩」や、「ローカルの土俗から液汁を汲みあげた詩」、さらには、「ひと本来の発語法としての肉声表現による牛」、そして、ついに「は、すべての『感動にみちあふれた詩』が発生の母胎とした、『きわめてアニミスティックな祭祀空間をより現実的かつより未来的に創出する祝祭劇』となって、具体的に実現されうるであろう。とりわけ、わたしの場合は、この島の縄文伝統にしっかりと根をおろしつつも、地下の深層から汲みあげた基層的な養力を、ユニークな祝祭空間へと四次元造形化していく、『縄文詩劇』となつて、ありていに表現されねばならないであろう。

## 二、縄文詩劇の詩法

### (一) テーマ

縄文詩劇の主題は、一貫して、「詩的共同体」的な生き方をのぞみ、もとめ、祈る、ひたむきなものと、それをさげすみ、嘲笑し、ときには圧殺しようとする、いちじるしく「散文的抗争体」的な生き方にどっぷりと首まで漬かった、旧体制保守にきゅうきゅうとするものとの、はげしい対立、葛藤、矛盾、不条理の、にがくもむごたらしい美に結晶するものでなければならない。

したがって、単に、縄文伝統への惑溺や陶醉のみをテーマとした作品や、過去の縄文世界への感傷的なノスタルジアに甘くとりけた作品は、排される。

まして、縄文空間への、主観的な絶対化や、恣意的な特殊化のみを強調する、観念的な主題にもとづく作品は、むしろ、有害なものとして、厳しく指弾されなければならない。

### (二) 性格

登場人物は、(一)のテーマをそのまま具現しうる、典型的な性格をもたなければならない。



すなわち、“詩的共同体”的に生きようとする人物と、“散文的抗争体”的に生きるしかない人物との、せつなくも不条理な対立の状況が、つくりだされなければならない。

もちろん、その中間的な性格も多く表現されうるが、主人公は、あくまでも、“詩的共同体”的な生き方を切願する人物であり、副主人公は、それと対立する“散文的抗争体”的な生き方に固執する人物でなければならない。

当然のこと、この、あい対立するもの同士の不条理劇としての葛藤は、どうじに、多くの場合、今日の人類状況における“散文的抗争体”的なものの優位という事実をしたたかに反映して、マインリテイたる“詩的共同体”志向者の挫折、敗北、滅亡による悲劇としての傾向を、色濃くもつことは不可避であろう。

### (三) 筋

プロットは、主旋律としての明快な音楽性につらぬかれていなければならない。

単に、詩の断章のよせあつめは、詩劇とはよばない。

詩劇とは、詩の最高度の表現形式としての“四次元性”を、複数の登場人物の声の多次元性や、音楽、舞踊、美術などのポリフォニックに交響する詩として実現するものであるから（もちろん、

登場人物が一人であっても、この交響性は、さまざまな方法で、多元的に表現しうる）、単に、詩の朗唱の配列を詩劇とよんではならない。

プロットは、テーマの不条理性をそのまま反映して、アリストテレスのいう、“急変”と“発見”をふくむ、オクターブの高い旋律の線を奏でなければならない。

また、アリストテレスのいう“哀憐”と、“恐怖”をふくむ、戦りつと涙を観衆に要求できるものでなければならない。

### (四) 構成

縄文詩劇は、すくなくとも、縄文世界の楽器の復元と演奏や、衣裳の復元と着装、装身具や日常用具の復元と使用をもとに上演されなければならない。

また、縄文ステップの創案などにもとづく縄文舞踊が、リズムを刻まねばならない。

さらに、縄文祭祀でもちいられていたであろう土面や羽根飾り、呪術具、さらに、ヒグマの首をかたどった巨大な“熊鬼”のような祭具も、また、想案され、使用されなければならない。

照明も、音響も、縄文世界の叫びや文様のバリエーションにもとづく美術と融合して、独特な根源世界を現出させなければならない

ない。

言葉と、音楽や音響と、舞いや踊りと、照明や舞台装置や衣裳をふくめた美術が、一体となつて、縄文世界の、原色に富んだ、始源の焰の世界を構成しなければならない。

### (五) 台詞

縄文世界の根源性を詩として肉声表現するには、どうすればいいか。

台詞は、すべて、感動ぶかく、すぐれた「詩」でなければならない。

アニミスティックで、アニマティスティックで、パーソニフィスティックで、セルフイスティックで、そして、コミュニティスティックでなければならない。

この島的で、風土的で、人縁的で、かつ、生活的でなければならない。

とうとうに、詩的共同体系の、ファルセットと地声の交響や、頭音（発生される声）と潜音（発生されない声）の二音のビートのリズム構成によって、独特の、土俗的な音象美を奏でなければならない。

### (六) その他

上演形態も、単に都市の劇場のみならず、ちいさな町や村の地域おこしと一体化した、住民総参加のシステムの創造も研究されなければ、感動ぶかい、あたらしい詩の創造を、世界にむけて発信してはいけないうであらう。

### 3 コミュニティズム詩論

はじめに

すでに、国家のフォルマリズムが、詩のスタイルに、潜在的な圧を加える時代は、終った。

すでに、経済的、行政的、軍事的な中央集権装置としての主都が、各地域の詩の創造者集団の上に君臨する世紀は、幕を閉じた。すでに、詩を、知的エリートの専有物として特殊化する時代は、消滅した。

われらは、せいぜい人口数千人人たらずの、コミュニティ（生活共同体）へと、全世界を再分割することによって、あらたな詩の原郷を再発見しなければならない。

われらは、それぞれの地域が、文化的に自立するエネルギーを

もって、真に個性的な詩の創造をかなえ、それによって、それぞれのコミュニティが、たがいに、世界の中心となり得べき、球面デモクラシーを確立しなければならない。

われらは、コミュニティを生存の基盤として、野の花を摘んだり、森の木と会話したり、小川のせせらぎといっしょに唄ったりする、きわめて大地的な、または荒磯的な、または、いちじるしく水辺的なくらしの深部からの、人類のあらたなポエジーを汲みあげてくる、たくましい生活者の詩を、せつなくも創造しなければならない。

あたらしい詩の感動は、もはや、国家・都市・知的エリート系の、散文的抗争体タイプの世界からは、うまれない。

あたらしい詩の歓喜は、コミュニティ・生活者系の、詩的共同体タイプの世界からうまれでる。

古代ギリシアの、アストラ村の、ヘリコン山で、詩神ムーサイから靈感をさづけられたという、「仕事と日々」「農事暦」の詩人ヘシオドスをみよ。

また、南仏プロヴァンスの、マイヤーヌ村の、プロヴァンス語の詩人ミストラルの、ついにはノーベル文学賞によって承認された、地方語の詩の勝利をみよ。

そして、日本の、東北の、人口数千の小さなコミュニティ花巻

から世界文学を創造し得た、かの、花巻語の詩人宮澤賢治をみよ。  
二〇世紀末の詩観は、すでに、都市の腐蝕して果てた排気ガス圏をはるかに貫通して、草原へ、川べりへ、森へ、そして、海へと、疾走しようとしている。

その速度の鞭で、発語本能の尻を、ぴしっと打て。

親自然へと鼻づらをむけた、野性的な詩想の馬は、光の蹄をうち鳴らして、飛びかけるだろう……よりあらたな美意識、よりあらたな感動の天末線へと。

## 1 詩材の選択

コミュニティズムの詩は、国家へ馴従しようとする詩のフォルマリズムへの、徹底的な拒否をつらぬくであろう。

世界を個権の主張体である国家へと悪分割することによって生じた、多くの災厄の残虐をみよ。

それ故、コミュニティズムの詩は、一貫して、みずからの立地する生活圏の、寿司屋のシャリの炊きあげの微妙な熱調整を、地球をとりまく大気圏の熱循環の生理学としてとらえ、うたうことができる。

旬の鮭のふわっと芳醇にふくらんだ身を舌にのせる瞬間の快樂を、あらんかぎりの美食家の学殖によって、うたうことができる。

けっして、都市のハイテク空間の檻におのれを密封した、自閉症患者のモノローグではなく、地球の太古の原風景へとにがにがしい凱旋を果たそうとするものの、くらしの周辺物への貪欲な関心にみちあふれた語りかけをなし得る。

そのため、詩材を、できる限り、身近のなまなましい事物によってみたさしめよ。

抽象の陽炎、観念のシャボン玉、概念の空箱を、塵芥処理せよ。試球の目に映じた、自分自身の存在の礎石としての、朝烏賊の刺身のおいしさ……つる薔薇の棘の痛さ……肉親との死別の悲嘆から、けっして、目をそらしてはならない。

コミュニティ……または、失われたコミュニティは、無色の大きな手で、無限の題材をさしだしている。

目をそらすな。それを、おのれの手に、おしただいて、受けよ。

その地方独特の、その土地ならではの、自分なりの詩材をもって、世界空間へと、たちすくめ。

詩材の選択……それは、すでに、決定的に、旧世界への退却か、新世界への挑戦かを、わたしたちに迫る。

心して詩材にむかわなければ、ついには、世界は、くるりと向うをむき、黙って立ち去っていくであろう。

そして、詩は、死ぬであろう。

## 2 主題の設定

コミュニティズムの詩の主題は、徹頭徹尾、詩的共同体と散文的抗争体の激しい対立、葛藤の火花でなければならない。

つまり、詩的共同体における、①人と自然の共生②命あるもの同志の信義の関係③神威の尊重によるアニミズムの知恵の保全④美意識優先⑤文化優位⑥家族的結合にもとづく自己犠牲愛の生き方⑦コミュニティ（生活共同体）を世界の最小分割単位と考える思想、の七つの傾向と、散文的抗争体における、①自然破壊②不信の関係③アニミズムの知恵への軽侮④美利優先⑤文明優位⑥弱肉強食の本能にもとづく他者犠牲の要求と戦争の是認⑦国家によって世界を分割し、都市中心に生きる、の七つの傾向との、さまざまの切り結びの稲妻をもって、詩の主題とせよ。

二〇世紀末の世界は、飽食に溺れる工業化地域と、飢餓にあえぐ自然状態地域に、むごたしく引き裂かれている。

詩的共同体的な時空は、環境汚染、民族・宗教対立、経済利潤追求欲、物質文明絶対視、暴力の慣習化、コミュニティ喪失による都市への難民の増大などの、散文的抗争体的な不条理の牙によって、ずたずたに噛みしだかれつつある。

全地球的な栄養不良児、文盲人口、ストリート・チルドレン、ホームレス、難民、内戦の急増による、一日に三万人ものこども達の死が、世界をおおっている。

これらの世界課題を、おのれの生の磁場の地域課題とし、個人課題とするとき、コミュニティズムの詩は、必須の今日的な主題へと到着し得る。

主矛盾をもって主題とせよ。

軽薄短小の副矛盾にうつつをぬかすことによって、詩の主題を卑賤なものとするな。

それは、詩の創造者の精神の衰退を証明することにほかならない。

### 3 肉声詩の原理

かつて、文字・活字に依存しなかった時、詩的共同体は、詩人のこよなき労働の場となった。

コミュニティにおける、肉声によるコミュニケーションの詩学は、人々を、真の親密な関係へと導いた。

いま、大量生産・大量消費のコマーシャルイズムの巨大装置は、詩を、商品としての流通価値ゼロと判定した。

散文的抗争体が、本性を露呈したのだ。

だが、それが何だというのか。

コミュニティズムの詩を、大都市中心にフル回転する、軽薄な利潤追求メカニズムに売り渡してはならない。

おのれの、幻想としての、または現実としてのコミュニティへと、素手で帰郷せよ。

すなわち、都市の一隅の溜り場で肉声詩をかわし合う、一瞬の詩的共同体へとUターンせよ。

または、ささやかな町や村の、古びた集いで肉声詩の火にりょう手をかぎす、現実の、うらぶれた共同体へと、根をおろせ。

当然のこと、コミュニティズムの詩は、文字よりは、活字よりは、電気加工された声や映像処理された声よりは、まず、なによりも、おのれの、なまの、真正銘の、天然自然の、かくれもなく己のみの個性の証したる、肉声によって、表現される。

朗唱詩を重んぜよ。

それよりは、もつと、即興的に口をついてでる、その時限りの口誦詩を重視せよ。

それが、コミュニティズムの詩の発生点である。

さらに、わたしの口誦詩とあなたの口誦詩の交響による、口誦詩劇の発現に注意せよ。

これらは、すべて、希願として、いま、論じられている。

実際には、創造された詩の、朗読詩化、口誦詩化、さらには詩劇化が、あくまでも、なんらかの幻想的かまたは現実のコミュニティの場で、肉声の詩として、演奏されよ。

当然のこと、肉声の階調がたかまって、旋律をよびさまし、さらには、地声のリズムが、ハーモニーの響きをよびよせて、詩は、すでに、音楽へと増幅されていくであろう。

詩は、ついに、歌となって、聴覚の空に、鮮かな虹をかけわたすであろう。

さらに、肉声の誘導によって、肉体が、リズムと響鳴して、動性を紡ぎだし、詩は、舞踊へと全身化するであろう。

さらに、いきいきと生動化した視覚は、声の音調に、多様な色彩のもえあがりを遠望し、ついには、肉声の彩りをこえて、詩的空間に、さまざまな美術的な祝祭をもたらすであろう。

衣装が……ヘアスタイルが……装身具が……そして、舞台空間が、色彩と造形の祭壇と化すであろう。

そして、ついに、コミュニティの詩は、ひとりひとりのモノフォニーの詩の肉声を、交響的な演劇空間へと高揚させて、肉声のポリフォニーとしての詩劇を生誕させるであろう。

ときには、朗読詩劇が、ときには、音楽・美術・舞踊・演劇と融合した詩劇が、たからかに、詩的共同体の成立を宣言するだろ

う。

もちろん、コミュニティの構成員たる、しごく生活者の人々の全員参加による朗読詩劇や朗読構成詩の上演があってもいいではないか。

観客なしの、その場にいる全員参加型朗読詩劇は、あらかじめ制作された音楽や音響効果、さらには、コーラスや群舞をさしはさむことによって、一層アーティスティックな空間を創出し得ようし、さらには、メーキャップや衣装による人格転移の時空変換を付加すれば、さらに、超次元的效果はたかまろう。声をださない人々が、一本ずつの木に扮して、舞台空間に「人間の森」を創出していくことの、コミュニティにおける人間連帯の効果は、はかりしれないものがある。

おわりに

こどもの詩を軽んじてはならない。都市化の空隙からたくましく繁茂してくる伝承・伝説・神話と現代の接点を見失ってはならない。共通語と同格のレベルへと身を起こしてくる方言の未来性を抹殺してはならない。書き手Ⅱ読み手という、散文的抗争体の罫に安住してはならない。

詩的共同体における、全員参加の肉声詩運動……これこそが、

きたるべき、そして、すでに数少ない実践者によって確証されつつある、コミュニティズムの詩の、もつともシンボリックな未来の可能性そのものとなるであろう。

#### 4 穂別コミュニティとの出会い

詩を、おのれの深部にせせらぐ原体験のながれにひたらしめよ。はじめて、日本詩人クラブ北海道大会が話題になったとき、わたしの想いをよぎったのは、それだった。

もし、詩が、シンフォニックな感動という、おかしがたく極私的な原風景がときはなつ言語美の虹であるのなら、それは、わたしの魂の原郷にはりわたされた、壮大な地平線のごときものであるはずだ。

それを、あけぼのの指でつまびくとき、まちがはなく、わたしは、身も心もゆりうごかすような感動にみちあふれた詩作品の創造をかなえることができる。

とつぜん、うまれ故郷の草原が、甘美なおいで、わたしの感性をあらった。そだちの郷でぎわめく白樺のささやきが、蜜のように、心の耳にしたたた。

いまこそ、おのれをして、詩のはじまりへと、凱旋せしめよ。それは、ぶあつく塗られたアスファルトの下への旅とな

ろう。

それは、たちならぶ高層ビルがめかくしてみせまいとする、そのむこうがわの、かつてそこにおいしげっていた古代の森への、超時空の旅となろう。

「札幌ではない！」

わたしは、想った。

たしかに、いまのわたしは、札幌をくらしのふるさとしてはいるが、わたしが深く根をおろしているのは、一八五万都市のおびただしい物量と技術と情報にむらがる巨大な人塊がひたかくそうとしている、土の感触であり、失われた巨木への畏敬なのであり、この大都市と対極の位置へとますますちぎれていく、函館近郊のうまれ故郷の草原や波うちぎわへと通底していく、なにか得体のしれないノスタルジアなのだ。

「穂別だ！」

わたしは、想った。

「おのれの地方を生きぬくものにとって、詩とは？」と問いかけるのに、特別の場所があるはずもないのは、たしかなことだ。

むしろ、いのちの発現点としての大地や渚からはてしなくおのれを隠匿するならわしに溺れがちな大都市でこそ、いつ層、その問いは、こわだかに、間断なく発せられなければならないまい。

それは、そうだ。

わたしにとつての、その問いは、いつも、おのれの生存の主たる磁場である札幌でこそ、より真摯に発せられるべき性質のものではある。

だが、そのうえで、なおかつ、全国の詩友たちが、それぞれに、おのれの地方を生きぬきつつも発する、じつに多彩な問いの総量を、もつとも明快でわかりやすく共有できる場とすれば、それは、共通の原点としての、森の葉かげであり、草むらのほとりであり、きよらかな流れのうたう川の岸べではないのか。

そこで、おのれのはるかな発生点をたしかめあい、かえす刃で、現在の生存環境におけるさまざまな根源下降のあり様を開示すべきではないのか。

「穂別だ、」

ちゅうちよなく、わたしは提案した。

かつて古代ギリシャ人が珍重した、人口数千たらずのポリスにもまごう、コミュニティ（生活共同体）としての面影をはぐくむ穂別町。

面積のほとんどを森にゆだね、清流と草原とメロン畑にうずもれてくらすひとびとは、宮澤賢治のロマンティシズムに同調し、浅野晃のポエジーに感応して生きる。

まさしく、詩的共同体ではないか。

ふたりの詩人のえがいた超時空的な軌跡をコミュニティのあゆみにとりこもうとしているこれらの人々こそは、わたしたち人類がふるさとの森をすてると同時にうしなつた詩的共同体とおぼしきものを、すでにかんがりのレベルで復権させようとしているのではないか。

そして、まことに賢明にも、すでに故人となつた二人の詩人への指標化は、北海道のベテラン詩人としての実績をほこる詩人斎藤征義氏をこの地によびよせ、まちおこしや生涯学習活動のかけがえないコーディネーターの役割をになわせているのだ。

穂別という町は、まぎれもなく、いま、詩的共同体創造の過程にある。

そうなのだ。

この町の名である、おそらくは縄文語・アイヌ語の「ポ・ペツ」あるいは「ポン・ペツ」（ちっちゃな川）がうちあけてくれるように、この地に、多分数千年以上むかしから住みついていた縄文の人々は、まったく詩的共同体のなかで生まれ、くらし、死んだのにちがいない。

それは、ニワンペツ（木のある川）、ペナキナウシ（川上にある蒲の多いところ）、ルペシペ（山越えの道）、ケツ・オ・ナイ（獣



皮をかわかす張り枠のある沢)などの地名や、町を貫流するムツカ・ペツ(ふさがる川)などとともにいまに残る縄文系の地名からもうかがい知られるように、まず、人と自然の共生が、すべての根本であった。もし詩が、わたしの総身にせせらぐ宇宙の摂理への祝祭だとすれば、この地に生きた縄文の人々は、エゾ松の木とかたりあい、アメ鱒と川を共有し、嵐と共存する知恵をさぐり、その極限に、自然への祈りとしての詩を結晶させていたにちがいない。

また、すべてに神威を感じて敬虔に生きるライフ・スタイルも、縄文人のながれをくむこの地のアイヌの人々にうけつがれて、川にのぼってくる鮭への感謝の神事アシリチェブノミヤ、森の熊の霊を天にかえすイヨマンテ(霊送り)の神事がならわしであったにちがいない。安政四年の記録で十一コタン八戸四四〇人をかぞえたこれらの敬虔な人々は、縄文人の祖からうけついで神事を、語りかけ、歌い、踊り、演ずるかたちの詩でとりおこなったにちがいない。

さらに、生きとし生けるもの同志の信義は、あつかったであろう。それなしには、しばしば襲う嵐や雪崩や地震や洪水などの大自然の試練をのりこえることはむずかしかったはずだ。

そして、家族的結合にもとづいた自己犠牲の愛をもって相互依

存的に生きるというライフ・スタイルも、小規模の集落であればこそ、不可欠の知恵であつたろう。

さらに、美意識優位や文化優位を身上として生きたにちがいないこれらの人々は、生存の基盤を、ほどよい規模のコミュニティにおき、そこでのくらしからうみだされる神話的スケールをもつた口誦文学のなかで、たしかな世界観、宇宙観を、想像力的に表現し得たに相違ない。

詩の根源的な力を中心としていとなまれる、生活共同体。

それは、詩的共同体とよぶにふさわしい、詩の母胎ともいうべきものだが、あくまでも、けつして巨大都市<sup>メガロポリス</sup>ではなく、ほどよく分割されたポリス状のコミュニティによって保全されたこの生活圏こそは、これからの人類の必須の思想ともいべきコミュニティズム(汎コミュニティ論)の発信源ともいえる。

これら、あたらしいコミュニティズムとしての詩的共同体の生き方を、そつくり、現代にうけついで生きぬこうとする穂別の人々から、わたしたちのまなぶべきことは、あまりにも大きいといわねばなるまい。

とりわけ、コミュニティズムとしての詩的共同体とは対極のものになりがちな、都市・国家中心主義としての散文的抗争体の中でにがにがしく生きぬかなければならないわたしたちにとって

は、人による自然破壊や神威の否定によるアニミズムの知恵の喪失、相互不信や他者犠牲の要求、実利優位や文明技術と物量への依存、そして大都市・国家の個権の主張のはての戦争と自滅へのおそれを克服し、あたらしい人類のあり様を、古代の予言者のようにたからかに詩う<sup>うた</sup>ためにも、この度の北海道大会は、札幌ではなく、穂別である必要があつたのだ。

まことに幸いにも、穂別案をうけ入れてくださった日本詩人クラブの役員のみなさまには、筆舌につくしがたい感謝と、そして、あたらしい詩の可能性の追求をめざす積極性に対する心からの敬意を表したい。

まさしく、石原武会長が、心にしみる名著『詩の原郷』（土曜美術社出版販売）の中で、世界各地の基層文化を死守する人々の口承詩についてのべた「その素朴な音韻への郷愁を無視して、今日詩は民衆のものとして、一人一人の心に届くだろうか」という指摘は、そのまま、ともすればイマジズム偏重の現代詩の袋小路にはまりかねないわたしたちの詩活動への警鐘ともれようし、それは、「自然の深層にある生きものたち——情緒の根っこを言葉につなぐ心の動き——それをへ抒情」と呼んでいいなら、ジェームス・ライトの再評価への気運は、現代アメリカにおける詩の本源的な抒情への希求をあらわしているように思われる。」という、

他の頁での言葉とあわせ、今大会のテーマ「おのれの地方を生きぬくものにとつて、詩とは？」に、ものの見事に連動している。そうなのだ。

目は、もういちど、おのれの内部の最深部にせせらぐ根源の光にむけられなければならない。

そのとき、わたしは、わたしの生きぬく地方としての札幌という表層現象をてがかりとしつつも、それをつき破って内実ふかくうがち入り、アスファルトの重層がひたかくそうとする大地のむせるような匂いや、地下水の冷瓏<sup>れんろう</sup>においていけるだろう。

そして、その究極に、極私的な原体験としてのわたしの感動の蜜が光るとき、わたしの言葉は、さらなる地方性をおびた詩として、世界への普遍をかなえることができる。

おのれの地方……それは、わたしの原点であり、わたしの磁場であり、わたしのはじまりである。

そこに、より深く、より鋭く、より永遠に、言葉のパイプをうちこむとき、わたしの詩は、もつとも地方的であることによって、もつとも極私的な世界文学としての資質をかなえうる。

穂別での前夜祭は、せせらぐ川とふところ深い森と、そして燃えさかる詩友の群れだった。

大会は、熱気に、魂がほどけて、流れで、たくさんの尊い詩友

の魂に合流した。

どこまでもどこまでも追ってくる緑の息づかい……踵を洗う数  
千万年前の海……未来の方から吠えかける、まだ名づけられてい  
ない獣の声……

やっぱり、穂別でよかった！

生きぬく力が、わいてきた。

おのれの詩業のゆくすえが、キラリとみえてきた。

しっかりと抱きしめて、わたしは札幌に、それぞれの詩友はそれ  
ぞれの生きる原点に散り散り去ったけれど、合流した魂の水音は、  
きつと、この列島の空に、いつまでも、澄んでいくだろう。

「おのれの地方を生きぬくものにとって、詩とは？」と、えいえ  
んに問いつづける日々が、またもはじまる。

### III 全員参加型野外詩劇『ボオの森の太陽まつり』の実験上演

#### 1 スタッフ、キャスト

脚本 原 子 修／札幌市

音楽 フォー・エヴァー／穂別町 代表 中野 憲明

キャストおよびスタッフ

金田一仁志／札幌市／俳優「ドリスとジョージ」で札幌市民芸

術祭奨励賞、国民文化祭や沖縄文化交流

などで舞台出演多数。

川端ひろ子舞踊集団／小樽市／縄文詩劇の会

稲里子ども会／穂別町／代表 三宅 邦俊 22名

穂別少年まとい太鼓／穂別町／代表 越前 一

事務局 五十嵐順一

鹿糠すえ子／穂別町／読み聞かせの会員

文芸ほべつ会員

山本むつえ／穂別町／穂別町民劇場、手話

ウタリ協会穂別支部／穂別町／代表 小石川武美

事務局 沢本 幸雄

鷗川アイヌ文化伝承保存会／鷗川町／代表 泉 辰江

事務局 中村 英雄

石井 由治／札幌市／北海道ウタリ協会札幌支部

穂別町出身／ムックリ演奏

穂友会／穂別町／民謡、代表 滝川 満夫

事務局 今村 敏子

稲友会／穂別町／民謡、代表 藤江 敏男

事務局 林 俊子

穂吟会／穂別町／詩吟、代表 平野 正

事務局 藤江 保徳

穂別ダンスサークル／穂別町／代表 丸山 範子

事務局 大江早智子

レクリエーションダンス同好会／穂別町／代表 藤江 利男

事務局 高橋 登子

穂別纏華太鼓／穂別町／代表 窪田 典子

事務局 本多 紀子

然別湖ネイチャーセンター／鹿追町／代表 崎野隆一郎

熱気球

琴紫会／穂別町／代表 山田マツ子、大正琴

加藤 勉／穂別町／穂別銀河鉄道の里づくり委員長 鉄板

ドラム担当

原田 幸一／穂別町／穂別消防団長、各章の叫び担当

一柳 義則／穂別町／富内プリオシン倶楽部、焚火担当

女 性／穂別町／ほべつ町民劇場、太陽担当

会場担当／光永 正巳 畠中 実 北倉 了一 三宅 邦俊

鹿糠 貢 浅野 初子 中沢十四三 稲垣 儀子

只野 勝江 渋谷 澄子、富内青年会

製作、演出担当／中沢 由幸 中野 憲明 佐藤 匡 五味

世津子 紺野紀美恵 小野寺敏数 本多 紀

子 平野 正 丸山 範子 高橋 登子

SAP

タイトル文字／稲木 徳男（穂別美術サークル）

トマトの絵／小滝 真弓（松本キミコ絵画サークル）

協力／タカオ、ノースランド、花よし

事務局／新免 克己（札幌） 斉藤 征義、斉藤 春樹（穂別）

2  
台本

全員参加型野外詩劇

『ポオの森の太陽まつり』

序曲 夢の太陽

加藤 勉さん

鉄板ドラムの大音響

原田 幸一さん

叫び

「序曲 夢の太陽」

琴紫会さん

大閃光

暗黒 沈黙

大正琴演奏（創作曲『古代の音』）

沈黙 暗黒

金田一仁志さん

ホッピー

「オホオホオホオホーッ（ファルセットで）」

（少女の声）

日が暮れて 夜が 暗黒の口をひらきはじめる

原子  
修

ステージ

⑤

B

A

⑤

⑤

（八九）

稲里子ども会

おとなの人たちも  
応援して下さい

太陽の声

(男の声

で

ホッピー

太陽の声

ホッピー

太陽の声

ホッピー

太陽の声

ポッピー

男 女

お陽さま お陽さま

わたしを見捨てて どこに沈んでいつてしまったの？」

「ホッピーちゃん（エコーで）」

「あつ お陽さま でも 今どこに？」

「ポッピーちゃんの すぐ そばだよ」

「変だわ お陽さま ついさつき 空のむこうに 沈んでいったはずなのに……」

「空のむこうは 夢の森 ポオの森 空のむこうは 夢の人

ホッピーちゃん わたしは そこに 沈んでいたのさ」

「じゃあ お陽さま あなたは わたしの夢の中の太陽？」

「そう もう 何億年も 何十億年も ずっとずっと

ポッピーちゃんの 夢の世界を照らしつづけてきた

私は夢の太陽……」

「お願いです 夢のお陽さま 姿をあらわして！」

子どもたちのシュプレヒコール

「お陽さま」

「お陽さま」

全員	男	全員	女	男	全員	女	男	女	全員	女	男	女	全員	男	女	男	女	全員	女	男	女
「お陽さま」	「夢のお陽さま」	「夢のお陽さま」	「どうか」	「今　すぐ」	「姿を　あらわして！」	「あらわして！」	「お願いします」	「お願いします」	「お願いします」	「お陽さま」	「お陽さま」	「お陽さま」	「夢のお陽さま」	「今すぐ」	「ポオの森の」	「ポオの森の」	「わたしたち一人一人の」	「心の空に」			

加藤さん

全員

「心の空に」

男

「あなたの」

女

「金いろのまばゆい姿を」

男

「あらわして！」

全員

「あらわして！」

女

「お願いです」

全員

「お願いです」

男

「お陽さま」

女

「お陽さま」

全員

「お陽さま」

男

「夢のお陽さま」

全員

「夢のお陽さま」

鉄板ドラムの大音響

大閃光

太陽 それまでかぶっていた黒衣をパツとぬぐ

明転

ポッピー

「オホオホオホオホーッ（ファルセットで）夢のお陽さまが  
姿をあらわしたわ」



詩人Aグループ

嘉藤師穂子さん

浅田 隆さん

綾部 清隆さん

村田 譲さん

三村美代子さん

橋本 征子さん

山本むつえさん

「フォーエヴァー」の音楽 創作曲「太陽よ」

「詩人Aグループ」一人一行詩

「太陽よ」

ホッピー

「今晚は 夢のお陽さま」

太陽

「今晚は ホッピーちゃん」

ホッピー

「(両手をあげ) さあ 会場みなさん お陽さまを歓迎して

両手を あげましょう そして 風のページに 文字をえがきましょう  
みんなで 一斉に 文字をえがきましょう」

「手話の会」スタンドに立つ

ホッピー

「さあ会場みなさん 手話の会の方のリードで 風のページに  
手話の文字を えがきましょう お陽さまを歓迎して 手話の  
文字を えがきましょう」

A

B

B

稲里子ども会

「手話の会」 ゆっくり 手話の文字を えがく  
ホッピ― 「(手話の文字にあわせて) ポォ ノ モリノ タイヨ― マツリ」

子どもたちのシュプレヒコール(ゆっくり)

「ポォ」

「ノ」

「モリノ」

「タイヨ―」

「マツリ」

「ポォの森の 太陽まつり」

ホッピ― 「会場のみなさん 一緒に 腹の底から 大きな声で

さけびましょう」

子どもたちと「会場参加者」全員で

「ポォの森の 太陽まつり」

「(拍手して) 拍手 拍手 拍手」

会場 拍手

暗転

会場みんな

会場みんな

B

第一楽章 一億年の海明け

加藤さん

鉄板ドラムの大音響

原田さん

叫び

「第一楽章 一億年の海明け」

うちよせる波の音 低く だんだん高く

フォーエヴァ

「フォーエヴァ」の音楽 創作曲「海明け」

太陽

「一億年前 このあたりは 海だった」

ホッピー

「オホオホオホオホーッ（ファルセットで）

海：いのちのはじまり 生きとし生けるものの 永遠のふるさと」

太陽

「一億年前の海が 今 あける」

ホッピー

「オホオホオホオホーッ（ファルセットで）

わたしのはじまり 世界のあけぼの ポオの海が 目をさます」

詩人Bグループ

「詩人Bグループ」一人一〇行詩

石井 眞弓さん

“海があける”

加藤茶津美さん

A

A

焚火まわり

熊谷ユリアさん  
阿久根 純さん  
清水 恵子さん

川端ひろ子舞踊集団

火の係 一柳義則さん

太陽

ホッピー

うちよせる波の音 低く だんだん高く

「太古の海にひたした わたしの 指の先から 熱くしたたる  
火のしずく…」

「いのちの しずく…」

「川端ひろ子舞踊集団」 タイマツをもって登場

太古の火を招き入れる巫女群の舞いを舞い土 炉に接近 炉のま  
わりで舞い やがて タイマツを炉に投じ 焚火に点火 火のまわ  
りを舞う 焚火 急速にもえあがり 退場

明転

ホッピー

「夢のお陽さまにさそわれて

一億年まえのポオの海から

えいえんのわたしが 泳ぎはじめる…

クビナガリュウのわたしが」

「少年まとい太鼓」の演奏

A

焚火まわり

応援して下さい

加藤さん

原田さん

フォーエヴァー

## 第二楽章

ポオの森のめざめ

板ドラムの大音響

叫び

「第二楽章 ポオの森のめざめ」

吹きすさぶ風の音

「フォーエヴァー」の音楽 創作曲 “森のめざめ”

ホッピ―

「オホオホオホオホーッ

クビナガリユウノわたしが

悠久の潮にあらわれて

すきとおった風のながれに ほどけていくわ

風が 北の大地をさぐりあて

光が 緑のシンフォニーを奏でて

いのちの木が たちあがる

ポオの森がたちあがる」

焚火まわり

B

A

稲里子ども会

「華太鼓の演奏」

子どもたちのシュプレヒコール

「木よ」

「木よ」

「木よ」

「赤エゾマツの」

「木よ」

「木よ」

「荒野をいとわず」

「北のさとに」

「あとに」

「辛抱強い根を」

「張るものよ」

「ものよ」

「木よ」

「木よ」

「木よ」

「赤エゾマツの木よ」

「木よ」

A

焚火まわり

(九八)

男	「凍てつく寒さに耐え」
全員	「耐え」
女	「針の葉で」
全員	「葉で」
男	「太陽系の愛を」
女	「縫いとめるものよ」
全員	「ものよ」
男	「木よ」
女	「木よ」
全員	「木よ」
女	「赤エゾマツよ」
女	「木よ」
全員	「木よ」
男	「みずみずしい時間を」
全員	「時間を」
女	「幹いっぱいたたえる」
男	「ダムよ」
全員	「ダムよ」
女	「香り高い夜明けが」
全員	「夜明けが」

[illegible]



「ポオの森で みんな 仲良く暮らしていけるのも

B

加藤さん

原田さん

第三楽章  
トマトの太陽

鉄板ドラムの大音響

お陽さま あなたの 夢いっぱい  
の光と熱のおかげです  
お陽さま ほんとうに ありがとう」

叫び

「第三楽章 トマトの太陽」

ホッピー

「なんてうれしいでしょう

お陽さま このまま ずっと いつまでも ポオの森で  
歌ったり 踊ったりしていられたら どんなに楽しいことでしょう」

太陽

「ホッピーちゃん わたしは 夢の太陽

みんなが 眠りからめざめる 明け方には

あたらしい一日をつくるために

ここを はなれていかなければならないのだよ」

ホッピー

「(泣いて) いや いや いや 夢のお陽さま

いつまでも わたしの中にいて 夢のお陽さま」

太陽

「だれもが 夢なしには 生きていけないけれど

でも ホッピーちゃん 同時に だれもが 夢だけでは

生きていけないのだよ」

ホッピー

「(泣いて) いつまでも 夢のままでいて お陽さま!」

太陽

「じゃあ わたしの身代りをポオの森に のこしていこう」

ホッピー

「夢のお陽さまの 身代り?」

太陽

「わたしの熱と光を たっぷり吸いとった大地から

沢山の作物が わたしの身代りとして

芽生え 育ち 花ひらき やがて みのるだろう」

焚火 急速に消える

次第に暗転

ホッピー

「お陽さまー! (叫ぶ)」

川端ひろ子舞踊集団

太陽の姿 じよじよに 黒衣のかげにかくれていく

「川端ひろ子舞踊集団」夜光のクマザサを手に登場  
踊りながら 熱気球のカバーをとりのぞく仕草

熱気球の為の火に点火する仕草

トマトの太陽を空によびだす 呪術の踊り

トマトの太陽 じよじよに 空へとのぼる

(踊り終っても 退場せず)

ダンスサークル  
レクダンス同好会

ホッピー

「トマトだわ！ 大きな大きな 夢のトマトが お陽さまの身代りとして ポオの森の空に のぼりはじめたわ  
(トマト語で) ~~~~~」

太陽の声

ホッピー

「(トマト語で) ~~~~~」  
「あつ ポオの森の くらし人が トマトの太陽と トマト語で お話をはじめたわ」

「ダンスサークル」「レクダンス同好会」

メロン、ナガイモ、カボチャ、キュウリなどの扮装であらわれ、  
トマトの太陽の下でダンス

(フォーエヴァーの作曲で) (そのまま退場せず)

この間 メロン語、ナガイモ語、カボチャ語、キュウリ語などと  
太陽のガヤガヤと騒がしい会話(意味不明)の声がつづく(テープ)

ホッピー

「お陽さま ありがとう あなたの熱と光をすいとった大地から  
メロン ナガイモ カボチャ キュウリ バレイショなどが  
どっさりうまれてくる

いや 作物だけじゃあないわ

ポオの森のくらし人が みんな

加藤さん

原田さん

詩人Cグループ

入谷 寿一さん

大貫 善也さん

安英 晶さん

森 れいさん

櫻井 良子さん

#### 第四楽章 人間の森

鉄板ドラムの大音響

叫び

「第四楽章 人間の森」

「フォーエヴァー」の音楽 作曲曲 “人間の森”

「詩人Cグループ」一人一〇行詩  
“人間の森”

ホッピ―

「人間の森…木も 草も 小鳥も 人も みんな  
ういういしい 命の火を もやしていくんだわ」

B

華太鼓

「華太鼓の演奏」

明転

焚火 パツと燃えあがる

ホッピ―

「さあ お陽さまにささげる “穂別勝手踊り” イッベサツ”が  
はじまるわ 会場みなさん お手持ちのものを勝手に鳴らして  
“穂別勝手踊り” イッベサツ”を盛り上げましょう 曲に合わせ  
て勝手に踊りましょう」

修

会場みんな

会場の全員 てんでに 持参の鳴物を鳴らす

原 子

「フォーエヴァー」の演奏 作曲 “穂別勝手踊り” イッベサツ”  
「穂別町の人々」ウマ ウシ クマ シカ キツネ ウサギ  
カラス などに扮し  
焚火のまわりで “穂別勝手踊り” イッベサツ”を踊る

会場の全員 踊りの環に入る

華太鼓

「華太鼓の演奏」

会場みんな

「町民有志」のクビナガリユウの舞い “イッベサツ”に加わる

加藤さん

原田さん

ホッピ―

（人物大の アンモナイト モササウルス デスモスチルス  
モササウルスなどに扮した踊り手がいてもいい）  
“イッベサツ”の踊りの環 ひろがる

「お陽さまにささげる ポオの森の「穂別勝手踊り」 イッベサツ  
さあ 会場みなさん 一緒に 踊りましょう  
お手元の木の枝を たからかにかざして  
人間の森の仲間入りを しましょう」

全員 火のまわりを踊る

終曲 ポオの大歓声

鉄板ドラムの大音響

叫び

「終曲 ポオの大歓声」

ホッピ―

「ポオの森は 人間の森  
木が人になり 人が木になる  
ポオの森は 人間の森  
お陽さまの恵みをうけて

B

会場みんな

加藤さん

全員

かしこく たくましく 生きていく  
さあ 会場のみなさん全員の ワーッという大歓声で  
ポオの森の太陽まつりの幕をとじましよう  
それでは 一二の 三」

ワーッという大歓声

鉄板ドラムの大音響の乱打

花火

全員の拍手で幕



### 3 分析(1)

「見物人の殻にとじこもる時代は終わった」

どうして、これほどまでに、穂別にこだわるのか。じぶんでも、よくわからない。一九九四年春、東京での日本詩人クラブの会合で全国大会を北海道で、との声がでた時、すかさず「会場は穂別で！」と言ってしまった。それが実現して、一九九五年夏、穂別は全国の詩人達の歓声で燃えた。今でも、会う度毎に「穂別は感動的だった！」の声がとぶ。一九九六年一〇月五日、穂別野外キャンプ場の詩の夕べで、わたしは、木の枝をふり、草の冠をかぶり、近くの詩の書き手の皆さんのクロス役のご協力を得て、肉声詩をはなち、突然、全員参加型野外詩劇の発想がひらめいた。穂別人たるわが詩友斉藤征義さんの「来年は野外詩劇をやってください」というありがたい要請を即座に受けたわたしの内部で、森が妖しくざわめき、太陽が明滅しはじめた。

一九九七年、雪どけと同時にキャンプ場を訪れたわたしの内部では、その年の一月に詩誌『ル・ファール』第一〇号に発表した詩論「コミュニティズム持論」の思想が渦巻いていた。

「あたらしい詩の感動は、もはや、国家・都市・知的エリート系の、散文的抗争体タイプの世界からは、うまれない。あたらしい

詩の歓喜は、コミュニティ・生活者系の、詩的共同体タイプの世界からうまれでる。」

これを実践しなければならぬ。たしかに、札幌からわたしの縄文詩劇の会の公演団が穂別に巡演すれば、事は簡単にすむ。だが、それでいいのか。そうではあるまい。コミュニティズム……つまり、地元人たる穂別の方々と、助っ人たるわれらヨソモノとの、熱い共働によって、しかも、観客がいつのまにか出演者になるという、全員参加型の野外詩劇こそが、今、実現されなければならない。

それから、何度、穂別を訪れたことだろう。詩友斉藤征義さんの献身をきっかけに、町民劇場の方々が燃えた、ぶたぶうふう塾の方々が燃えた、町文化協会の方々が燃えた。

いつしか、穂別勝手踊り「いっぺさつ」のリズムがうまれ、トマト語が誕生し、一〇〇メートルのクビナガリュウがうめきだし、読み聞かせのストーリーがうまれ、手話の身体造型がたちあがり……すべて、創作でやろう！ 上手下手はぬきにして、穂別ならではの独創でいこう！ 音楽も作曲で、踊りも振りつけでいこう！

実行委員会がうごきだし、七月一八日の第一次台本で「ポーの森の太陽まつり」が、姿をあらわしはじめた。工事用の鉄板ドラ

ムの大音響……各楽章の宣言……大正琴の作曲演奏、男でも女でもあるクビナガリユウの子ホッピーちゃんのナレーション、太陽、子らのシュプレヒコール、道内外の詩人たちの自作詩の肉声化、手話の造形、川端ひろ子舞踏集団の呪舞、松明、焚火、太鼓、クビナガリユウの舞い、北海道ウタリ協会穂別支部、鶴川支部の方々の歌と踊りとムツクリ演奏、読み聞かせの会の方のお話、穂別音頭の民謡民舞、創作短歌の詩吟、熱気球によるトマトの太陽の出現、ダンスとレクダンスの方々の仮装踊り、そして焚火のまわりでの、会場の全員参加による穂別勝手踊り、イツベサツ、全員のワーツという大歓声、花火、全員の拍手による閉幕。

全体を、地元ミュージシャングループ「フォーエバー」の作曲ですっぽり包み、札幌のエージェント「SAP」の音響と照明で一ヘクタールの舞台を演出する。もちろん、観客を出演者化するための仕掛けとして、全員が鳴物を持参し、声を出し、手話造形をし、一緒に踊る……

盛り上がるにつれて、台本は第二次版(七月二二日)、第三次版(七月三〇日)へと変容し、タイトルも「ポオの森の太陽まつり」へと確定し、八月六日の第四次台本で完全に、穂別の方々の主導体制はでき上った。

あとは、神様が、当日の天気をととのえるのみ。

本番は、すばらしかった。批評家などというさん臭い存在はゼロ。全員出演者タイプの、すべて手作りの創作による、地域立脚型の、創造型の、新しいコミュニケーションの詩は、かくて、ものの見事に、穂別で創造された……地元人<sup>びと</sup>と到来人<sup>びと</sup>の共働体制<sup>コラボレーション・システム</sup>の中で。

黒衣となつて走り回り、焚火の火勢をあげ、鉄板ドラムを打ち、出演団体の誘導に奔走し、弁当をくばり、入口に華道をしつらえ……森の一本ずつの木、草むらの一本ずつの草も、参加して、穂別に、あたらしい地域文化の芽が、たからかに吹きこぼれた。

見物人の殻にとじこもる時代は終わった。さあ、とびだそう……地球六〇億人劇場の時代の幕をあげ、穂別のあらたな宇宙へ。

#### 4 分析(2)

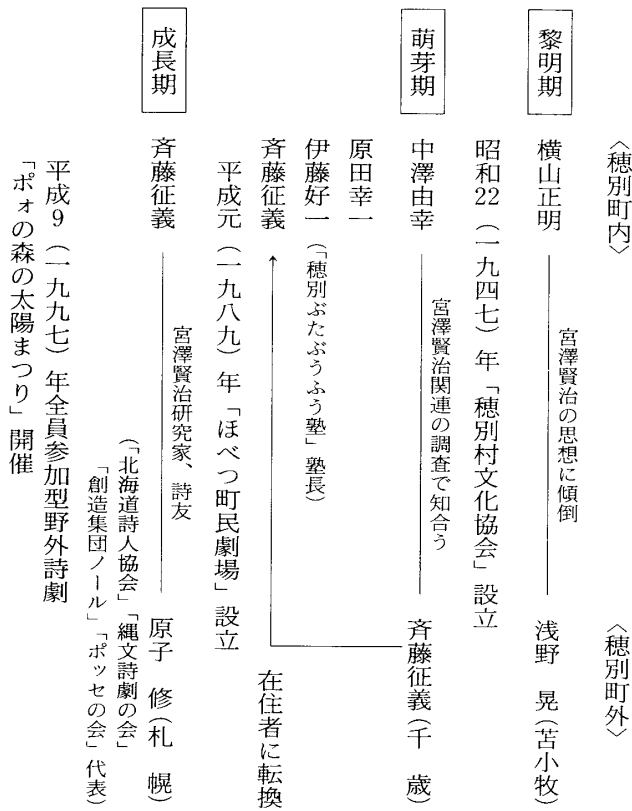
- ① 「ポオの森の太陽まつり」上演における、アーティストグループとの連携

「ほべつ町民劇場」の成立は、昭和二二(一九四七)年に初の穂別村公選村長となった横山正明と詩人浅野晃(東京より苦小牧に流遇)との、花巻の詩人宮澤賢治の詩的共同体思想を介した出会いによる協働関係の構築が潜因の一つと考えられる。穂別在住者

と非在住者が、穂別という地域空間の文化を協働創造するネットワークが発動し、横山正明（地元）と浅野晃（外来）の協働により穂別村文化協会が結成された。

しかし、「ほべつ町民劇場」成立の直接的なきっかけは、当時千歳在住で横山正明調査に乗り出した宮澤賢治研究家で詩人の斉藤征義が、外来者として穂別人と接触を始め、穂別在住の中澤由幸、

### 宮澤賢治をキーとした協働関係



十四三夫妻、原田幸一、伊藤好一らと協働関係を結び、斉藤征義が穂別町役場の職員として在住者に転換することによって、強力な協働ネットワークが形成されたことである。中澤由幸は「健康農産物研究会」の溝口富次らと地域共同体づくりに取り組み、ふるさとおこし運動の一環として、実行委員会を結成しては町外の劇団を招き公演活動を展開したが、平成元（一九八九）年の斉藤征義の穂別への移住を契機に、より広範な町外のアーティストグループとの協働による地域文化活性化運動がネットワーク化された。これが「ほべつ町民劇場」の立ち上がりであり、「劇団ふるさとときやらばん」「倉橋ルイ子ステージトラククライブコンサート」「劇団統一劇場」「サハリン州人形劇場」「ドイツ・アッコバストリオの夕べ」「ザイラー・ピアノデュオ」「アンデルセン童話原画展」「日本詩人クラブ北海道大会」などの主催・後援・支援などを通して、演劇・音楽・美術・文学などの幅広い分野で、主として鑑賞型の地域文化振興に、町外アーティストグループの協力を得ることが基盤となった。中澤夫妻、斉藤征義、地元の若手ミュージシャングループ「フォーエヴァー」（中野憲明、小野寺敏数ら）を中心とする地元アーティストや地域活動家は、町外アーティストグループを受け入れるアートマネージャーの役割を果たし、結果として穂別の地域文化活性化を意図する戦略をとっている。この段

階で「札幌と子どものためのコンサート」「原木流送仕事唄の記録採集」「サウラアの帽子賞制定」「原木流送仕事唄の発表」「ほべつ町民劇場文庫発刊」などの、住民参加型・創造型の事業が萌芽していた。

町外アーティストグループと町内アーティストグループの本格的な協働体制が始動するのは、斉藤征義の詩友で詩人の原子修（札幌在住）が穂別と接触を持ち始めたことによる。「コミュニティズム詩論」の提唱者で、国内外での数多くの詩劇の創作と公演の経歴を持ち、地域立脚型の詩的共同体論者で、「宮澤賢治論」の著書を持つ原子修は、早くから、宮澤賢治を介した(1)横山正明と浅野晃、(2)斉藤征義と中澤夫妻らの協働関係に着目し、平成七（一九九五）年の「日本詩人クラブ北海道大会」の会場を穂別にと提言し、実現に努力した。また、穂別を舞台として町外と町内のアーティストグループの本格的な協働体制による、全員参加型の野外詩劇の構想を提案し、斉藤征義と中澤夫妻、そして「穂別ぶたぶうふう塾」（故武田武夫を囲む地域研鑽グループから出発したもの）構成員を含む「ほべつ町民劇場」のメンバー、さらに藤江保徳を会長とする「穂別町文化協会」の各ジャンルのアーティストグループとの協働のもと、初の全員参加形式による野外詩劇「ポオの森の太陽まつり」が実現した。町外アーティストグループとし

ては、いずれも原子修が代表となっている「北海道詩人協会」「縄文詩劇の会」「ボッセの会」「創造集団ノール」を中心に、道外の「日本詩人クラブ」のアーティストも加わって、穂別における協働ネットワークは、地域ぐるみのスケールへと発展し、「ほべつ町民劇場」は新しい段階に入ったといえる。

## ② 「ポオの森の太陽まつり」上演における企画、伝達

非協働型の公演活動は、知名度の高い、遠隔地のアーティストに、高額のギャラを支払って依頼する場合が多い。商業化し、パターナ化したプロモーター、プロデューサー、演出家、脚本家、制作者、キャスト、スタッフによる、その地域とほとんど無関係なテーマや題材の公演は、鑑賞型オンリーになり易く、地域の人々は、二次文化（外来の鑑賞型文化）を見物する傍観的な立場に追いやられる。このタイプの公演が続けば、地域の人々の関心は薄れ、地元主催者は入場券の売りさばきに苦勞し、ついには押し売り・義理買い・券は出たが当日客席はがらという実態が頻発する。このようなマンネリズムを、地域の側から打破する目的で誕生した「ほべつ町民劇場」が、長い試行を経て、九年目に到達したのが、今回の全員参加型の野外詩劇「ポオの森の太陽まつり」であった。

協働型の公演活動のテストケースであるこの事業は、まず、外来アーティスト原子修の提案を検討する、中澤由幸、斉藤征義、藤江保徳、伊藤好一ら地元アーティスト関係者を中心とする「穂別ぶたぶうふう塾」の会合から始まった。特定個人の発想に全員が従うという方式ではなく、地域立脚型・住民参加型・他地域アーティストとの協働型・創造型・全員参加型の野外詩劇という基本条件に沿って、一人一人が意見・発想・創意を出し合う企画会議が展開された。穂別ならではのテーマと題材が、フリートーキングの中から浮かび上がってきた。ボランティアの外来アーティスト原子修が意見交換や発想の出し合いの中からテーマと題材を記録・整理・集約・構成し脚本化する役割を負担し、場所・期日・公演形態のあらましは斉藤・中澤・藤江ら地元アーティスト関係者が中心となつて構想立てられ、企画案は誕生した。この間、非常に柔軟なネットワーク機能体である「ほべつ町民劇場」は、「穂別ぶたぶうふう塾」「穂別町文化協会」などに粘菌的に入り込み、同化し、企画を練り上げるアートマネージャーの役割を果たしている。

やがて、「ほべつ町民劇場」の粘菌体は、さらに増殖して、「ポオの森の実行委員会」を全町民レベルで構築し、経済支援者たる財北海道文化財団の共催を得て、企画はほば形を整え終わる。「穂別

ぶたぶうふう塾」「穂別町稲里子ども会」「文芸ほべつ会」「ダンスサークル」「レクダンス協会」「琴紫会」「穂別纏華太鼓」「読み聞かせの会」「穂友会」「少年まとい太鼓」「ほべつ銀河鉄道の里づくり委員会」「北海道ウタリ協会穂別支部」が、ほべつ町民劇場化していく過程で、地域立脚型・住民参加型の条件が満たされていく。さらに、地域全体をカバーし得た「ほべつ町民劇場」は、一層増殖して、町外の協働者グループを実行委員会にのみこみ始める。「北海道詩人協会」「創造集団ノール」「縄文詩劇の会」「ボッセの会」など札幌のグループを始め、「詩誌『北海詩人』」「詩誌『核』」「詩誌『錨地』」「詩誌『饗宴』」「ジャパン・ポエトリー・レビュー」「詩誌『青芽』」「日本詩人クラブ」所属のアーティストが、札幌・苫小牧・北広島・千歳・恵庭・室蘭・江別・徳島から参加し、熱気球担当の「然別湖ネイチャーセンター」（鹿追）のメンバーや鶴川アイヌ文化伝承保存会、北海道ウタリ協会北海道支部（札幌）のメンバーと共に協働する。

公演当日は、エージェントのSAP（札幌）も舞台監督の一翼を担い、地元の手話関係者、「稲友会」「穂吟会」「美術サークル」「絵画サークル」も協力し、地元音楽家集団「フォーエヴァー」の演奏を背景に、観客も手話、音出し、声出し、踊りで参加した。全てを創作作品という一次文化（地域創造型文化）で構成した

この公演の進行過程そのものが、新聞、テレビなどのマスコミ対策を含めて穂別地域内のみならず全道的な人的支援と伝達ネットの形成となった。

### ③ 「ポオの森の太陽まつり」上演における、人的支援と経済的支援

地域立脚型・住民参加型・創造型の地域文化の創出にとって、不可欠の条件となる協働ネットワークは、二つの側面から支えられる。

第一は、人的支援である。専門的な知識と技術と見識と経験を蓄積した人材が、その地域で得られない場合は、外来の協働者の支援と協力が必要になる。「ほべつ町民劇場」は、斉藤征義という多機能アートマネージャーを内部に擁することによって、原子修という外来の多機能アートマネージャーを引き込み得、全員参加型の野外詩劇という、新しい地域文化の創造に成功した。基本的にはボランティア精神に基づく協働者の人的支援をどう獲得するかが、地域内のアートマネージャーの最大の課題となろう。また、地域内の人的支援ネットワークの形成が重要な課題であり、「ほべつ町民劇場」は、ネットワーク型の粘菌運動によって、固定化したシステムを越える協働の成果を生み出し得た。

第二は、経済的支援である。「ポオの森の太陽まつり」の会場は穂別町営キャンプ場内の、森に囲まれた一ヘクタールの草原の特設ステージだったが、照明・音響・舞台設営に多額の経費が必要だった。これらの費用を賄うためには、(1)公的支援、(2)企業支援、(3)参加者支援が要請される。この面でも地元アートマネージャーと外来アートマネージャーの協働が効を奏し、「ほべつ町民劇場」は仕掛人としての責任を果たし得た。

#### (1) 公的支援

外来協働者原子修のアドバイスで、(財)北海道文化財団(札幌)の共催を得、必要経費の四五%強に相当する共催費の助成を受けることができた。(財)北海道文化財団は、平成六(一九九四)年設立の北海道の第三セクター的な地域文化振興機関であり、「北海道を道民一人一人が心の豊かさを実感できる地域社会とするため、道民生活の全般に係る幅広い文化の振興などに関する事業を積極的に推進し、もって北海道らしい個性的な地域文化を創造・発展させるとともに、すべての道民が文化の恵沢を享受することができきる生活文化圏を築いていくことを目的として」(設立趣意書)事業を推進するため、「まちおこし道民シアター」や「地域文化ふれあい創造事業」などを実施している。「ほべつ町民劇場」は、「ポオの森の太陽まつり」を「まちおこし道民シアター事業」の一環と

して承認した財北海道文化財団を共催者とすることにより、公的経済支援をする協働者を得た。

(2) 企業支援

在住アーティスト齊藤征義らの人的ネットワークで、町外の企業から、「ほべつ町民劇場」への経済支援があり、実行委員会の公演費に当てられた。メセナとしての企業の文化支援は、経済的な協働者として不可欠の存在だが、日常の円滑な信頼関係に基づいた人間関係なしには、企業は経済的な協働ネットワークに参入しない。穂別出身の実業家（苫小牧在住）二人による企業メセナを始め、千歳の大手企業の支社三社による支援などは、すべて、在住アートマネージャー齊藤征義という穂別サイドのキーパーソンを中心とした「ほべつ町民劇場」の日頃の人脈づくりに負っている面が大きい。

(3) 参加者支援

「ポオの森の太陽まつり」に、キャスト・スタッフ・観衆として参加した約四〇〇人が、それぞれ、ボランティア精神に基づく自己負担をしている。会場が穂別町の市街地からかなり離れているため、町内外の参加者のほとんどが、何らかの交通手段を講じ、費用を自弁した。また、太鼓などの楽器や小道具類の搬入・搬出、町外参加者の宿泊費・食費など、数字にできない経済支援が、数

百人の参加者によってなされたのも、この公演が、一人一人が主体的な参加者となり得る協働型のものであったからにほかならない。